



小倉磐夫先生を偲ぶ

黒田 和 男

(東京大学生産技術研究所)

東京大学名誉教授小倉磐夫先生は、食道がんのため、70歳の誕生日をあと10日余に控えた10月6日深夜、小金井市の聖ヨハネ桜町病院ホスピス病棟にて、お嬢様に看取られ息を引き取られました。

先生は1954年東京大学理学部物理学科を卒業後、同大学院に進学、1959年卒業と同時に東京大学理学部物理教室助手に任ぜられ、結像光学系の評価に関する研究に従事されました。その後、1961年日立製作所に入社、中央研究所に勤務し、応用光学からレーザー工学にわたる広い分野で研究と指導に当たられました。この間1962年3月より8か月間米国パーキンエルマー社メーザー部門の客員研究員としてレーザーの研究に従事されています。1967年には、東京大学生産技術研究所に講師として着任され、翌1968年に助教授、1976年に教授に昇任され、1991年東京大学を停年退職されました。引き続き千葉大学工学部に移られ、1996年まで教鞭を取られています。

先生は6年間の企業の研究所勤務を除き、生涯の大部分を大学教授としてキャリアを積み重ねていますが、平均的な大学教授の物差しでは測れない、型破りのパーソナリティーの持ち主でした。先生は学会活動にはあまり熱心ではありませんでした。日本光学会(光学懇話会)の関係では、「光学」の前身の「光学ニュース」の編集委員長を務めています。その後、応用物理学会の理事や評議員を引き受けていますが、あまり目立った学会活動をしていません。もちろん学会を軽視したわけではありませんが、先生は自らの活動の場を学会とは別の場所に求め、独特のスタイルで日本の光学界に大きく貢献してきました。

先生の最大の研究業績は、カラーテレビブラウン管の蛍光体ドットの製造に使用する特殊非球面レンズの設計、製造に関する発明でありました。大変明快な理論に裏打ちされた学術的にもレベルの高い研究ではありますが、特許を提出されただけで、ついに原著論文にも解説論文にもなって

いません。発明の核心は、電子の光学と光線の光学の本質的な違いにあります。すなわち、光は渦なし場で、回転の収差は存在しませんが、電子は磁場の周りを回転するため、回転の収差が存在します。筆者が院生時代に、研究室の輪講会で何度か収差図(理想像点と実際の像点を結ぶ矢印の集まり)を示してこの事実を説明されていたのを覚えています。電子の収差図にはループに沿って一周する成分がありますが、光の収差図にはそのような成分は存在しないのです。このため、電子の軌跡を光線でシミュレートするには連続的な波面ではだめで、不連続点をもたせる必要があります。こうして、切り込みの入ったセグメント非球面レンズのアイデアに到達し、その設計、製作法を確立しました。先生はこの発明がことのほかご自慢で、当時の米国の有力企業数社に技術供与され、会社は高額の特許料を稼いだとよく話していました。このあと報奨金の話に移り、その計算式は二重対数の法則に従うとって締めくくることが常でした。

先生はまた「人」について溢れるほどの好奇心をもっていました。科学技術も人間活動の一部ですから、どんな発明発見にもそれを成し遂げた人がいますし、どの工業製品にもそれを設計、製造した人、そしてそれを使う人がいます。先生の興味はそういう人たちに向けられました。このため学会誌には決して載らない種類の情報を、新聞や週刊誌をはじめ各社の社史やビラの類まで丹念に集めていました。さらに「ニューフェース診断室」の関係で多くの光学設計者と会談し、その発言を克明に記憶していました。また、特許についても詳しく先生の得意なフィールドのひとつでした。このようにして集めた膨大な資料は部屋の机の上に乱雑に積み上げられていました。しかし、頭の中ではきっちりと整理されていたようで、必要な資料を紙の山の中からやすやすと見つけ出すのには感心させられました。

先生は主な活躍の場を、『アサヒカメラ』や『写真工業』

といった商業誌に求め、健筆を振るわれました。この2誌には長期にわたって連載記事を寄稿しています。また、『アサヒカメラ』の「ニューフェイス診断室」のドクターとしてカメラのテスト評価に活躍されたことは有名です。先生の大学院時代の指導教官であった小穴純先生が初代のドクターに就いた関係で、診断室にはテクニカルイラストレーターとして創設時からかわりをもたれ、1970年からはドクターとして活躍されています。先生はもともと絵を描くことがお好きで、若いとき画家を目指されただけのことはあり、カメラの分解図をご自分で描いていました。診断室のために描いた分解図は400枚を超え、ばらばらに分解されたカメラを教授室でよくみかけたものです。「分解図は写生ではない。機構を明らかにし、強調すべきは強調し、また省略すべきは省略し、構図を決定する、一個の作品である。ところが最近無断で借用する者がいて困る。目立たないようにイニシャルを入れることにした」と言っていたのが印象に残っています。

先生がライフワークとしてカメラにかかわったのは、カメラを愛していたからには間違いありませんが、それ以上にそのカメラを開発した技術者に興味を抱いていました。われわれはよく先生に連れられて六本木の街に食事に出ましたが、そこでは光学技術やそれに携わった人々についての話が尽きず、飽きることはありませんでした。今から思い返すと、六本木のとんかつ屋こそ先生の教室でした。『アサヒカメラ』に連載されたエッセー「Dr. オグラの写進化論」にはこのような光学技術者の話が多数取り上げられています。その一部は『カメラと戦争—光学技術者たちの挑戦』と題して単行本にまとめられ、この9月には朝日

文庫の文庫本にもなっています。本の評判は上々であるという話を聞いて、先生は病床でたいそう喜ばれたそうです。先生のエッセーは、人物観察の鋭さと、描写の面白さで際立っています。普段表舞台に出ることの少ない技術者たちを取り上げ、愛情をもって、ときにユーモアを交えて描いてみせます。最後にホロリとさせるところなど、文学作品の域に達していました。しかし一方で、先生は毒舌家としても有名でありました。相当辛辣な評論も歯に衣を着せずばりといつてのけ、あまりに切り口が鋭すぎて、血が飛び散るような感じさえ受けることもありました。先生は人物評価の物差しを能力に置き、できる人を好みました。その意味で、世間一般の尺度と異なっていたわけではありません。研ぎ澄まされた観察眼と旺盛な批判精神をもって人物、事柄の本質を見抜き、的確に表現する、そういう能力に人一倍恵まれていたのです。先生は第一級の評論家であり、そこに先生の真骨頂があったように思います。

くつろぎのときもありました。将棋がお好きで、夜遅くまで指したことが懐かしく思い出されます。その当時の得意戦法は筋違い角でした。

先生は病床で、自分はこれまでわがままを言って仕事ばかりしてきたが、しかしまだやり残したこともあり、もう少し続けたい、と言っていたそうです。先生はもともと頑健なたちで、これまでほとんど寝込まれたことはありません。まだまだ十分お仕事を続けられる体力をおもちでしたが、それがかえって仇となったか、がんの進行が早く、最初の摘出手術から8か月足らずでついに帰らぬ人となってしまいました。30年にわたるご指導に感謝し、心よりご冥福をお祈りいたします。